

氏 名： 中村 もとゑ
学 位 の 種 類： 博士（看護学）
学 位 記 番 号： 甲 第 5 号
学位授与年月日： 令和6年3月12日
学位授与の要件： 学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目： [和文]在宅高齢者のドライスキン改善を目指した教育プログラムの
効果：無作為化比較試験による検討
[英文] Effects of an Educational Program Aimed at Improving Dry Skin
Among Elderly Individuals at Home : Investigation by Randomized
Controlled Trial
論文審査委員： 主査 西片久美子
副査 百田 武司（主研究指導教員）
副査 姫野 稔子（第1副研究指導教員）
副査 原 玲子
副査 野口 眞弓

博士学位審査結果の要旨

本研究の目的は、ドライスキンのある在宅高齢者に対し、ドライスキンの改善を目指した教育プログラムを提供し、効果を検証することである。ドライスキンを改善することにより、経皮薬の治療効果の向上、貼付剤を原因とする皮膚症状の低減、褥瘡やスキナーテアといった皮膚トラブルの回避にもつながり、生活の質を高めるうえでも重要である。

本研究では、「ドライスキンの改善を目指した教育プログラムを受けたドライスキンのある在宅高齢者は、プログラムを受けない高齢者と比較して、下腿前面の角層水分量が改善する」を仮説としている。先行研究では、ドライスキンに対するスキンケアの必要性が指摘されながらも、施設の看護・介護職への教育的な介入研究があるのみで、在宅高齢者自身が行うための介入研究は確認できず、本研究の新規性・独創性が認められた。

教育プログラムの内容は、国内外の文献検討に基づき、①知識・技術の提供（テキストブックによる教育及び保湿剤塗布方法の実演）、②セルフモニタリングの支援（皮膚の観察、自己管理ノートへの記録の支援）、③角層水分量の定期的な測定によるフィードバック、④行動目標の立案・修正・評価の支援であり、**Transtheoretical Model** を基盤とした。介入期間は4か月間で、この間に6回の個別面談を行い、その後2か月間のフォローアップ期間を設けている。

研究は1と2に分けて実施された。研究1（予備研究）では、ドライスキンの改善を目指した教育プログラム（案）の適用と課題を検討することを目的とし、介入群7名、対象群6名を対象に無作為化比較試験を実施した。主要評価項目である下腿前面の角層水分量の変化量から研究2（本研究）のサンプルサイズを算出し、脱落率16%を見込み、介入群・対照群各32名をリクルートすることとした。また、後期高齢者の方がドライスキンが多く、知識が少ないことを示す先行研究から対象者を75歳以上とし、さらに、研究対象者数を確保するため紹介事業所に、地域包括支援センターや居宅介護支援事業所等を追加するなど、研究2（本研究）に向けて修正を行った。

研究 2（本研究）では、研究 1（予備研究）の結果に基づき、プログラムの効果を検証する目的で 64 人（介入群 32 人、対照群 32 人）を対象に無作為化比較試験を行った。その結果、両群のベースラインデータの基本属性と評価項目に有意差は見られず、プログラム完了率は 93.8%、脱落率は 3.1%であった。なお、追跡不能となった対象者より、それまでのデータの使用許諾の撤回はなかったため、欠損データについては、最後に観察した際の値を代入する Last Observation Carried Forward (LOCF)法で補完し、Intention to Treat (ITT)解析を行った。主要評価項目は介入終了後（介入開始から 6 か月時点）の下腿前面角層水分量の変化量であり、副次評価項目は①介入開始から 4 か月時点の下腿前面角層水分量の変化量、②前腕角層水分量の変化量、③ドライスキンの症状、④スキンケア行動の実施状況、⑤皮膚の観察、⑥保湿剤の使用量である。これらの項目は文献検討より導かれ、根拠のある内容となっている。

調査の結果、主要評価項目である 6 か月時点の下腿前面角層水分量の変化量は介入群が有意に高かった ($p = .012$; $d = 0.64$)。

4 か月時点で有意差が認められた副次評価項目は、下腿前面角層水分量の変化量 ($p = .022$; $r = .29$)、保湿剤使用頻度 ($p = .011$; $r = .32$)、皮膚の観察の実施頻度 ($p = .011$; $r = .32$)、保湿剤使用量 ($p = .006$; $d = 0.73$) で、いずれも介入群に多かった。6 か月時点の副次評価項目では、介入群に、保湿剤塗布方法 ($p = .015$; $r = .31$)、皮膚の観察の実施頻度 ($p < .001$; $r = .44$)、保湿剤使用量 ($p = .004$; $d = 0.76$) が多く認められた。

以上の結果より本研究の仮説は支持され、介入群ではドライスキンの改善に加えて、保湿剤使用頻度や皮膚の観察の実施頻度等のスキンケア行動の変化も生じたことが確認できたことから、実証性においても優れていると評価された。

本研究は、国内外の文献検討を丁寧に行い、根拠に基づいた介入方法を検討し、研究方法の適切性・妥当性を確認するための予備調査を経て本調査を行った。終始、論理的・系統的に実施され、論理的一貫性が保たれている。さらに、これまで研究されていなかった在宅高齢者に着眼した教育的プログラムを作成することができた。このことは、在宅看護学、老年看護学に新たな知見を提供する意義ある研究であると高く評価できる。本論文は、研究題目から研究方法、結果、考察に至るまで一貫性があり、研究の限界と今後の課題についても妥当な内容が記され、説得力のある論文となった。

以上から学位審査論文審査基準を満たしており、合格と判定した。

2023 年 12 月 25 日に最終試験を実施し、研究題目から研究方法、結果、考察及び成果の活用や発展に関する質疑応答から、研究者として自立して新規研究を立案・遂行する能力、その基盤となる学力、専門知識・技術など豊かな学識を有することが認められた。

これらのことから、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値があり、また、論文内容及び関連する事項について口頭試問を行った結果から全員一致で「合格」と認めた。